

LOVE in Letter 6

～輸血を受けた患者さんのメッセージ～

はじめまして。

私は膠原病と血液の病気がある患者です。膠原病とはもう15年もつきあっていて、輸血とは無縁でした。しかし、昨年夏から貧血が出てきて血液の病気という事がわかり、治療法が決まるまでの3ヶ月間は輸血だけが頼りでした。

その時は病名も治療法もハッキリしない不安、死の恐怖、輸血のリスク…。そんな事ばかり考えていました。こんな私にとって重要な輸血のための血液がどこからきているかなど、その時は考えもしませんでした。

でも、日本赤十字社の方からこのお話を頂いた時、初めて献血して下さった人達のが頭に浮かびました。昔、親友がよく献血をしていました。私は膠原病になった時、彼女の事を思い出し、私も一度くらい献血をして人の役に立っておけばよかったなあと考えたものです。なぜそんなに献血していたの？と彼女に聞いたところ、「昔、父に輸血してもらったから、自分も何かの役に立てないかと思って…。」と言っていました。健康な時に何度も献血するチャンスがあったのにしなかった自分、輸血をしているのに治療のひとつとしか考えていなかった自分…。なんとも情けないです。

初めて輸血した時、身体中に血が巡り温かくなり生きている事を実感しました。あの温かさは、献血して下さった人達の心の温かさなんだと思います。人の役に立ちたい、ちょっと休憩がてらに、おやつもらえるし…献血して下さる人達の理由も様々あると思います。でも、どんな理由であれ献血して下さる事は本当にありがたいことです。

私は皆さんに間違いなく生かされています。私はまだ生きたいんです。やりたい事、やらなくてはならない事がまだまだあるんです。今は皆さんの温かい御協力に心から感謝しています。本当にありがとうございます。そしてまだまだ輸血を必要としている仲間もたくさんいます。その為にも、献血の輪が広がることを切に願っています。

最後にこの手紙の企画を持ってきていただいた日本赤十字社の近藤さんに感謝いたします。献血をして下さる人達にお礼の気持ちを伝える事ができました。ありがとうございました。